

菊島隆三

菊島隆三・黒沢明共同脚本「用心棒」第2稿台本

菊島隆三・黒沢明・小国英雄共同脚本「椿三十郎」台本（決定稿）

小柳津浩

小柳津浩『学校演劇論』1953（昭和28）年11月 甲陽書房

小柳津浩『青年演劇脚本集』1958（昭和33）年7月 甲陽書房

『小柳津浩脚本集 二発の銃声』1986（昭和61）年9月 山梨舞台芸術センター

竹内勇太郎

竹内勇太郎「赤帽母ちゃん」原稿

竹内勇太郎『山本勘助』第1巻 1985（昭和60）年8月 学習研究社

山本有三作・竹内勇太郎脚本「真実一路」台本（第2稿）

後期展示 10月1日（火）～3月2日（日）

【詩】

青柳瑞穂

青柳瑞穂『睡眠』1931（昭和6）年1月 第一書房

青柳瑞穂「玉堂の花」原稿

尾崎喜八

尾崎喜八『山の絵本』1935（昭和10）年7月 朋文堂 表紙 片山敏彦

尾崎喜八「遠い日の山小屋」原稿（複製）

金子光晴

金子光晴「似顔絵の似たる日秋の足の冷」色紙

金子光晴『落下傘』1948（昭和23）年4月 日本未来社

金子光晴『こがね蟲』1923（大正12）年12月 新潮社

杉原邦太郎

杉原邦太郎「昨日は靡く翠であつた」色紙

「山脈」創刊号 1930（昭和5）年8月

杉原邦太郎『火山』1930（昭和5）年2月 機山閣書店

内田義廣

内田義廣『花の群落』1976（昭和51）年4月 日本未来派の会

上野頼三郎

上野頼三郎「犬のように」詩稿

上野頼三郎『村の生活』1930（昭和5）年10月 村落社

山口啓一

山口啓一『石炭と花』1930（昭和5）年5月 機山閣書店

中室員重

中室員重『兵隊詩集』1931（昭和6）年8月 海図社

米澤順子

米澤順子「額のある静物」油彩 昭和初期

米澤順子『聖水盤』1919（大正8）年11月 東京堂

米倉寿仁

米倉寿仁『透明ナ歲月』1937（昭和12）年4月 西東書林
「甲府派」創刊号 1954（昭和29）年11月

宮田樗夫

宮田樗夫「オパールの変転ルビーの紋章」色紙
宮田樗夫『仮面』1954（昭和29）年10月 甲府派発行所

曾根崎保太郎

曾根崎保太郎「酩酊が抱くフェニックスの卵黄」色紙
曾根崎保太郎『灰色の体質』1954（昭和29）年11月 甲府派発行所
「未踏」創刊号 1950（昭和25）年3月

野澤 一

野澤一「四十一歳三月三日夜作」未定稿
「童子行」1号 1937（昭和12）年5月

津嘉山一穂

津嘉山一穂「未刊詩集」草稿

鈴木久夫

鈴木久夫「断崖」原稿
鈴木久夫『断崖』1930（昭和5）年11月 民謡レビュー社

鈴木祐之

鈴木祐之「心の傾きに」原稿
鈴木祐之『わたしのヒロシマ』1969（昭和44）年3月 甲陽書房

小林富司夫

小林富司夫「地は落葉線路の枕木を一本一本渡ってゆくと満月がいたぼくは冬の満月をすぎた」色紙
小林富司夫『きいろい炎』1949（昭和24）年5月 中部文学社

土橋治重

土橋治重「甲州は颯爽と山々が肌を脱いでいた夜は深々と星がかがやいた」色紙
土橋治重 詩集『花』1953（昭和28）年1月 日本未来派発行所
「風」129（終刊）号 土橋治重追悼号 1993（平成5）年12月

中込純次

中込純次「詩集母と恋人」原稿「山茶花」
中込純次『母と恋人』1929（昭和4）年1月 国風閣

一瀬 稔

一瀬稔 筆 のむら清六 画「裏山で」軸装
一瀬稔 詩集『山鶏』1940（昭和15）年10月 中部文学社

【短歌】

伊藤生更

伊藤生更「北の方より駒鳳凰農鳥と我が目を移す雪の高山」軸装
「美知思波」創刊号 1935（昭和10）年6月
伊藤生更『山雲』1953（昭和28）年10月 美知思波発行所

中村美穂

「アララギ」第18巻第5号 1925（大正14）年5月
中村美穂『佛顔』1931（昭和6）年9月 みづがき社

相澤貫一

相澤貫一『石水集』1971（昭和46）年6月 発行人 古谷幸江

若尾隣平

若尾隣平『若尾隣平遺稿集』1971（昭和46）年1月 発行人 若尾朗

中大路佳郷

中大路佳郷「われ生れし虎年なれば病める身に渴を入れつつ初陽あみをり」短冊
中大路佳郷『華葩』1987（昭和62）年2月 須曾乃短歌会

伊藤映二

伊藤映二「朝霧」原稿
伊藤映二「西行はどこら辺りで笠上げて見たであろうか赤い富士」色紙
伊藤映二『揺籃時代』1926（大正15）年10月 上田書店

飯野真澄

飯野真澄「広き田の南寄りに黒牛は立ちて居るなり代掻を止めて」色紙
『飯野真澄歌集』1971（昭和46）年8月 白玉書房

青木辰雄

青木辰雄「六階の食堂にゐてやややに茜うするる時を過ぎしぬ」短冊
『青木辰雄歌集』1989（平成元）年8月 青木文子

相澤 正

『相澤正歌集』1954（昭和29）年1月 白玉書房

許山茂隆

許山茂隆「病院に歌のメモ帖持ちゆけどけふも空白のまゝ持ちかへる」色紙
許山茂隆『郷園』1947（昭和22）年7月 国民文学社

鈴木 孝

鈴木孝「丘上の枯桑原に鳴る風のいく日吹きなば春や来向かふ」軸装
「樹海」創刊号 1954（昭和29）年7月
鈴木孝『丘のある街』1966（昭和41）年10月 甲陽書房

佐野四郎

佐野四郎「地に生くるなべてをいたはる如くにもいわし雲しづかにそらおほひくる」軸装
佐野四郎『杉の花粉』1934（昭和9）年7月 朝日書房

渋谷 俊

渋谷俊『華鬘』1939（昭和14）年4月 柳正堂書店
与謝野晶子「序に代へて」歌稿（渋谷俊『華鬘』所収）

渋谷玻璃子

渋谷玻璃子『無礙の光』1929（昭和4）年12月 柳正堂書店

茂手木みさを

写真パネル 1933（昭和8）年、与謝野寛、晶子夫妻来県の折
茂手木みさを『一隅の薔薇』1930（昭和5）年4月 朝日書房

【俳句】

今村霞外

今村霞外「初汐にのりて美しすて扇」短冊

今村霞外『法燈』1954（昭和29）年8月 私家版

五味洒蝶

五味洒蝶「寒曝をみる人まれに石叩」短冊

五味洒蝶『洒蝶句集』1964（昭和39）年9月 雲母社

辻 路村

辻路村「冬の雲その白きゆえ弧なりけり」色紙

辻路村『樹影』1973（昭和48）年7月 雲母社

榎本虎山

榎本虎山「蛩ゐていのち静かに露を染む」短冊

角田雪弥

角田雪弥「竹の葉によすがのひかり冬の水」短冊

角田雪弥「月代の蛇籠をくぐる水の音」色紙

角田雪弥『畦火』1987（昭和62）年7月 竹頭書房

山田岫雲

山田岫雲「冬雲に親子遠しや山畑」一枚物

山田岫雲『朴の花』1975（昭和50）年11月 発行 山田武雄

柏木白雨

柏木白雨「新蕎麦会句会記」1942（昭和17）年8月22日

柏木白雨『白雨句集』1977（昭和52）年7月 若葉社

鈴木青処

鈴木青処「祖母のゐて紅梅苔む子の娶り」短冊

山口青邨選「稿本青処句集」

堤 俳一佳

堤俳一佳「電話より文に情あり後の月」短冊

堤俳一佳『俳一佳句集』1951（昭和26）年4月 裸子発行所

加賀美子麓

加賀美子麓「川千鳥月より鳴いて落ちにけり」色紙

加賀美子麓『火度』1987（昭和62）年8月 牧羊社

赤堀五百里

赤堀五百里「淵明も李白も来よや屠蘇酌まむ」短冊

赤堀五百里『萬里』1995（平成7）年5月 読売・日本テレビ文化センター

石原八束

石原八束「露の彩動き赤富士現しけり」色紙

石原八束『秋風琴』1955（昭和30）年8月 書肆ユリイカ 題簽 石原舟月

新免一五坊

新免一五坊「冬日とははうふつとしてある思ひ」短冊

【川柳】

篠原春雨

篠原春雨「三階の一間に小僧病んでゐる」色紙

中沢春雨

中沢春雨「団十郎日本一の目玉なり」短冊

『騷愁 中沢春雨川柳句集』1967（昭和42）年11月 甲陽書房

雨宮八重夫

雨宮八重夫「一本の道あり明日へひた行かな」色紙

雨宮八重夫『遍路美知』1977（昭和52）年9月 サンケイ新聞社

田中浮世亭

田中浮世亭「浮世亭句抄」

【漢詩】

香川香南

香川香南『香南詩鈔』1926（大正15）年11月

村松蘆洲

村松蘆洲「送兒定孝之瑞西」漢詩色紙

村松蘆洲『蘆洲詩集』1980（昭和55）年5月 発行人 村松定孝

写真パネル 蘆洲が創建に関わった山縣神社（甲斐市）

笠井南邨

笠井南邨 撰 土屋竹雨 評『翰墨縁』詩稿・印譜

開館35周年記念企画展「金子兜太展 しかし日暮れを急がない」

会場 展示室C



(3) 特 設 展

① 開館35周年記念特設展「生誕140年・歿後50年 中村星湖展」

期 間 令和6年4月27日（土）～6月23日（日） 51日間

会 場 展示室C

趣 旨 明治40年代、自然主義文学の隆盛期に小説「少年行」で文壇に登場した中村星湖（富士河口湖町生まれ）の生涯と作品を取り上げた。小説のほか、フローベル、モーパッサンの翻訳、民衆芸術や農民文学運動に関わる評論活動など、多彩な業績を紹介した。

展 示 資 料 一 覧

*の資料は寄託資料

生まれは河口村

卒業證書 1903（明治36）年3月28日

中村星湖「序」原稿

早稲田大学に入学

早稲田大学卒業アルバム 1907（明治40）年

「少年行」一文壇に登場

中村星湖「少年行」原稿

中村星湖「新序」原稿

中村星湖「二葉亭四迷を語る」原稿

早稲田大学文学科修了證書 1907（明治40）年7月5日

中村星湖「熔岩のくずれの富士の裾はじつに広漠たる眺めである」軸装

同時代の人々

坪内逍遙 中村星湖宛書簡 1914（大正3）年10月4日

田山花袋 中村星湖宛書簡 1909（明治42）年12月9日

田山花袋 中村星湖宛書簡 1924（大正13）年9月23日

正宗白鳥『田山花袋全集』推薦文

菊池寛 中村星湖宛書簡 1919（大正8）年7月21日

島崎藤村 中村星湖宛葉書 1908（明治41）年9月17日消印

島崎藤村『藤村随筆 上』「はしがき」原稿

島崎藤村『破戒』再刊の会合案内状

正宗白鳥 中村星湖宛葉書 1942（昭和17）年10月14日消印

島崎藤村「あら雄々しきかな傷ましきかなかの常盤樹の落ちず枯れざるときはぎの枯れざるは百千の草の落つるよりいたましきかな」額装

島崎藤村「われ住めばいつしか壁もまばらに満床ことごとく雪の珍珠を散し時には頸を縮めてくらきなみだも飲みたれど古人が樹下のすみかを憶ひて心をひるがへしたり」額装

夏目漱石からの手紙

夏目漱石 中村星湖宛書簡 1911（明治44）年7月25日

小説と翻訳と

中村星湖「女之首」草稿

中村星湖「女のなか」原稿

中村星湖「復活祭の後」草稿

吉江喬松 中村星湖宛書簡 1921（大正10）年7月9日

島崎藤村 中村星湖宛葉書 1921（大正10）年12月17日消印

島崎藤村 中村星湖宛葉書 1940（昭和15）年3月18日

欧州歴訪

フランス渡航の送別会での寄せ書き「濤声帖」
中村星湖「ロマン・ロランの印象」草稿
椎名其二 中村星湖宛書簡 1928（昭和3）年7月23日
正宗白鳥 中村星湖宛書簡 1929（昭和4）年3月～5月（推定）
中村星湖 川島順平宛書簡 1929（昭和4）年1月18日
川島順平 中村星湖宛書簡 1929（昭和4）年1月30日
中村星湖「滞欧日記（1）」1928年
中村星湖「滞欧日記（2）」1929年 個人蔵
中村星湖「パリの下宿の窓から見た風景」油彩
留学時に使用したトランクと愛用のベレー帽
青山義雄 ガンジー像 油彩 個人蔵
中村星湖「印度洋を横ざりて」草稿
中村星湖「ガンジーの死」草稿
中村星湖戯曲「手紬車」草稿
中村星湖「アルプス登山の話」草稿
中村星湖「ユーゴスラヴィアの印象」草稿

書の世界

中村星湖「遊戯三昧 昭和甲申夏」額装
中村星湖「奈満よみの甲斐の百合女の愛しさや老をなだむと起ち舞ひ給ふ」軸装
中村星湖「誕辰七十七回来鑑面蓬頭圭角□聞我生時撤筵席明星□想秣槽隈」軸装
中村星湖「枕頭白鳥湖」額装 寄託資料
中村星湖「「幻のくに」を枕へに目さむればゆり女は眠る少女のごとく」軸装
写真「河口村の生家前庭にて」額装
中村星湖「山荘八景」襖
中村星湖「怒るなと母が諭せし言の葉のかなしからずやなほ耳にあり」色紙
中村星湖「巴里に来て図らずしりしアレ ज्याの姉と妹のブラジルむすめ」短冊 ＊
中村星湖「億兆の悪業われをめぐるともみひかり受けし身にやはあらぬ」短冊 ＊
中村星湖「ふる郷の古き軒端に梅咲けばありしなごらの父恋しけれ」短冊 ＊
愛用の品々

筆まめな星湖

石橋湛山・梅子 中村星湖宛書簡 1964（昭和39）年8月19日
石橋湛山 中村星湖宛書簡 1964（昭和39）年11月16日消印
相馬御風 中村星湖宛書簡 1919（大正8）年1月3日
中村星湖 野尻抱影宛書簡 1962（昭和37）年12月14日
野尻抱影 中村星湖宛書簡 1962（昭和37）年12月18日

文化は郷土より

犬田 卯 中村星湖宛書簡 1929（昭和4）年4月21日
中村星湖「五湖地方文化協会規約」草案
中村星湖「世界農民史大系執筆者予定趣意書」草稿
柳田国男 中村星湖宛葉書 1943（昭和18）年2月7日
住井すゑ 中村星湖宛書簡 1943（昭和18）年10月27日

童話と「赤い鳥」

中村星湖「魚の番人」原稿
鈴木三重吉 中村星湖宛書簡 1929（昭和4）年9月7日
中村星湖「とほい呼鈴」原稿
中村星湖『こども聖書 旧訳物語』はしがき 原稿

中村星湖『こども聖書—旧約物語』「はしがき」原稿

中村星湖『こども聖書—旧約物語』「あとがき」原稿

富士を仰いで

中村星湖「富士の残雪」原稿

中村星湖「富士百態」草稿

中村星湖「河口湖にうつる富士」草稿

中村星湖「あら玉の年たち帰るこのあした真白き富士に見よ茜さす」一枚物

中村星湖「芭蕉の句」草稿

中村星湖「虚子翁と語る」草稿

中村星湖「漢訳 芭蕉翁雲霧之序並句」一枚物

釣りざんまい

中村星湖『釣ざんまい』原稿

中村星湖「酒匂川のアユ」草稿

島崎藤村 中村星湖宛書簡 1935（昭和10）年（推定）9月23日

中村星湖作成 スクラップブック

中村星湖作成スクラップブック 6冊

Nakamura Seiko



開館35周年記念特設展 生誕140年・歿後50年

中村星湖展

2024年4月27日[土]~6月23日[日]

そのことばのつぎへ
山梨県立文学館
Yamanashi Prefectural Museum of Literature



② 開館35周年記念特設展「文学はおいしい」

期 間 令和6年7月13日（土）～8月25日（日） 39日間

会 場 展示室C

趣 旨 文学作品に登場する印象的な食の場面、作家と食べ物のエピソードなど、文学の中の「おいしいシーン」を取り上げ、館蔵資料を中心に紹介した。会場には、県内市町村から提供いただいた地元の食を紹介するパンフレットを設置、観覧者に自由に持ち帰っていただいた。また、展示室とミュージアムショップや観覧室を巡るスタンプラリーを実施した。

展 示 資 料 一 覧

*の資料は寄託資料

やまなし・葡萄のめぐみ

パネル展示「甲斐八珍果」（大森快庵『甲斐叢記』前輯一）

パネル展示「甲斐名所寿古六」〈原本 山梨県立博物館蔵〉

パネル展示 甲州街道勝沼宿の場面（仮名垣魯文「身延参詣甲州道中膝栗毛」より）〈原本 山梨県立博物館蔵〉
芥川龍之介 山本喜誉司宛書簡 1910（明治43）年10月14日（推定）個人蔵

石井柏亭「葡萄之図」与謝野寛・与謝野晶子賛「葡萄より甲斐の山見るむらさきの岩の洞にて海を見るときと晶子」軸装

与謝野晶子「むら山に雲みて三日の川の鳴りわれは塵なき葡萄畑ゆく」短冊 *

与謝野晶子「甲斐の秋錦のきれのおかれたる葡萄の畑とこし山の青」色紙 *

窪田空穂「峡川の笛吹かはを越え来ればこの高はらはみな葡萄なる」軸装

檀一雄「葡萄二皿」水彩画 *

田中冬二「渡り鳥」草稿

曾根崎保太郎「ミューズの乳を祝福しバッカスの歌を讃めて葡萄を選ぶ」色紙 *

小川国夫「私は葡萄の木だ枯れない葡萄の幹だ」色紙 *

木々高太郎「葡萄」原稿

木々高太郎「葡萄」切り抜き（「新青年」1942年10月）

青柳瑞穂「枇杷と桜桃」原稿

林真理子「葡萄が目にしみる」草稿

甲州のうまいもの

小川千甕「甲州紀行画卷」

飯田龍太「梅漬けの種が真赤ぞ甲斐の冬」額装 *

飯田龍太「ほうとう」原稿

飯田龍太「ほうとう 郷愁の味」校正刷り

飯田龍太宛 幸富講寄せ書き 1969（昭和44）年7月6日）額装 *

飯田龍太旧蔵 釣り竿「わすれね」 *

熊王徳平「甲州に生きる（三）」原稿

中村星湖『『ほうとう』と『やきもち』』原稿

食卓の風景

正岡子規「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」句碑拓本 額装

正岡子規「財布賛」軸装 *

正岡子規「飯待つ間」原稿〈複製 原本・虚子記念文学館蔵〉

窪田空穂「年の神この松にしも降りませ忝しや真白なる飯」軸装 *

芥川龍之介「芋粥」未定稿

太宰治「斜陽」原稿〈複製 原本・日本近代文学館蔵〉

太宰治「斜陽」草稿

田中冬二「富士ビューホテルにて」額装 *

山口誓子「匙なめて童たのしも夏氷」軸装 *

坪田譲治「うちの良い子はお菓子好きとなりの良い子もお菓子好き良い子はみんなお菓子好き」軸装

芥川龍之介 ヨーグルトの広告文案

武田百合子「日々雑記」原稿

大庭みな子「舞へ舞へ蝸牛」原稿（第13回「うなぎ」）
 村田喜代子「鍋の中」原稿
 高村光太郎「レモン哀歌」原稿（複製 原本・日本近代文学館蔵）
 泉鏡花「湯島詣」原稿（複製 原本・日本近代文学館蔵）

お酒のシーン

堀口大馬「酒の粕とは言にこそ」色紙
 井伏鱒二「勧酒」対幅（複製）
 井伏鱒二「十一屋の若旦那」原稿
 檀一雄「おめざの要る男」原稿
 太宰治 熊王徳平宛はがき 1944（昭和19）年9月10日
 熊王徳平「その墓に酒打ちかけよ桜桃忌」色紙
 山本周五郎「青べか物語」原稿（第27章「毒をのむと苦しい」）
 与謝野晶子「法隆寺など行く如し甲斐の御酒春鶯囀のかもさるゝ蔵」軸装 ＊
 大吟醸「春鶯囀のかもさるゝ蔵」酒瓶 萬屋醸造店
 清酒「方代」酒瓶 齋彌酒造店
 清酒「方代」酒瓶 笹一酒造株式会社
 吟醸酒「右左口路」酒瓶 大冠酒造株式会社
 「周五郎のヴァン」ワインボトル 中央葡萄酒株式会社
 林真理子記念ワインボトル 原茂ワイン株式会社
 林真理子「葡萄物語」草稿

料理する作家たち

檀一雄旧蔵ワインボトルの籠と湯呑み茶碗 ＊
 檀一雄「静物」水彩画 ＊
 檀一雄「酢・油」水彩画 ＊
 写真パネル 佐藤真樹撮影 今川焼「夢屋」店内の深沢七郎
 横尾忠則デザイン「夢屋」ポスター
 赤瀬川原平デザイン「夢屋」包装紙

いのちを食べるということ

宮沢賢治 保阪嘉内宛書簡 1918（大正7）年5月19日 ＊
 宮沢賢治「永訣の朝」原稿（複製 原本・宮沢賢治記念館蔵）



③ 新収蔵品展 直筆を楽しむ

期 間 令和7年2月1日（土）～3月23日（日） 43日間

会 場 展示室C

趣 旨 令和5年度から令和6年度にかけて、新たに収蔵した資料の中から、樋口一葉、高浜虚子、富安風生、土屋文明、芥川龍之介、藤原定など、直筆原稿や手紙、書画など個性的な筆跡を楽しめる資料を紹介した。

展 示 資 料 一 覧

*の資料は寄託資料

通俗書簡文

樋口一葉「通俗書簡文」草稿（未定稿C「猫の子もらひにやる文」）軸装

三宅花園

三宅龍子「堤柳 こぎ返る舟まつほ도를堤みち結ひてはとく青柳のいと」短冊

短歌

北原白秋「松風のしぐるゝ寺の前どほりとほる人はあれと日の暮のかげ」短冊

斎藤茂吉「『源實朝』について」原稿 *

石川啄木『悲しき玩具』1912（明治45）年6月 東雲堂書店

塚本邦雄『水葬物語』1951（昭和26）年8月 メトード社

芥川龍之介 山本喜誉司宛書簡

芥川龍之介 山本喜誉司宛書簡 1910（明治43）年10月14日

芥川龍之介 山本喜誉司宛葉書 1912（明治45）年4月1日

柏木白雨旧蔵資料

土屋文明筆 正岡子規長歌「やまめ三尾は甲州の一五坊より」衝立

高浜虚子「大空に又わき出でし小鳥哉」軸装

高浜虚子「早春の鎌倉山の椿哉」軸装

柏木緑節「長々と吉田の町の羽子日和」短冊

柏木緑節「七十にして機を織る母の秋」短冊

柏木白雨「初御空富士は神住み給ふ山」色紙

柏木白雨「長月の富士紫紺なる新婚」短冊

高浜虚子「山村に冬の朝日の当り来し」短冊

高浜虚子「我齡老柳汝に若かめやも」短冊

高浜虚子「避暑に来て一日帰農の友を訪ふ」短冊

近藤浩一路画「高浜先生像」高浜虚子賛「霜降れば霜を盾とす法の城」軸装

星野立子「霞中おどろく赤さ夕焚火」軸装

高浜虚子「家の裏溪流京の秋に似し」短冊

高浜虚子「大祖父の下に我等も炉辺和談」短冊

近藤浩一路「大露や赤富士雲を近づけず」短冊

高浜年尾「山荘の此爽涼を去る気なし」短冊

星野立子「なつかしきひそかな花と岩菲見る」短冊

星野立子「日々芒解けつゝ人を待ちにけり」短冊

高浜虚子ほか「昼寐帖」

富安風生「機音も富士もとく覚めさはやかに」色紙

富安風生「富士の霧压倒し来る月見草」色紙

富安風生「南縁に富士うら窓の竹の春」色紙

富安風生「初富士に門辺すなはち渚なる」短冊

富安風生「白雨まず風鈴さげて訪ひくれし」短冊

柏崎夢香「桐一葉月の社をよぎりけり」短冊

柏崎夢香「秋の蝶西湖をひくゝ渡りけり」短冊
深川正一郎「新そばも老の手作りもたいなし」短冊

飯田蛇笏・飯田龍太

飯田蛇笏「秋たつや川瀬にまじる風の音」短冊
飯田龍太「冬山のふかき襷かなこゝろのかげ」短冊
飯田龍太 安部保男宛書簡 1962（昭和37）年10月11日
写真パネル 若林賢明撮影 飯田龍太

志村さゝを旧蔵資料

志村さゝを「山國の山の重なる遠山火」色紙
志村さゝを「年行くや人に貧富の溝深く」短冊
志村さゝを『遠山火』原稿
志村さゝを『風花』原稿
福田蓼汀「全島の椿咲くまゝ落つるまゝ」短冊
「甲府城北句会発会記念」寄せ書き色紙
高浜虚子「日高きに宿もとめ得る栗の花」一枚物
原石鼎「花影婆娑とふむべくありぬ岨の月」短冊
飯田龍太「黄金虫うす雲竹のかなたにて」短冊
長谷川かな女「白魚の腕を手に思ふ佛の手」色紙
山口青邨「菊咲けり陶淵明の菊咲けり」短冊
山口青邨「みちのくの町はいぶせき氷柱かな」短冊
門坂波の穂「花の闇しづかに人のまぎれけり」短冊
鈴木青処「金の帯ほそきが愛し流し雛」短冊
中山 秋岳「母と人参にんじんいろに灯りけり」短冊
加賀美子麓「煮凝りに母なき月日はじまりぬ」短冊
堤俳一佳「病人に皆がやさしく炉辺にゐる」短冊
堤 高嶺「刈り込まれ並木の空が寒くなる」短冊
五味酒蝶「蝌蚪の水ほのかに野火のうつりけり」短冊
榎本虎山「禽ちらす陽に声あげて霜崩る」短冊

山梨ゆかりの文学者の手紙

中村星湖 菅佐智子宛葉書 1951（昭和26）年7月15日
中村星湖 菅佐智子宛書簡 年不明9月4日
室生犀星 丸山邦夫宛葉書 1937（昭和12）年6月6日消印 ＊
土橋治重 堀内幸枝宛葉書 1987（昭和62）年1月9日

山梨ゆかりの文学者の原稿

前田晁「責任を好まない人」原稿
武田泰淳「東方書局のこと」原稿

中村璋

写真パネル 中村璋撮影 1950年代の河口村から見た富士山

藤原定旧蔵資料

藤原定「ぼくの言葉」原稿
藤原定「鳥の眼」原稿
藤原定 詩ノート
藤原定「いとし子に」色紙
藤原定「天地悠大にして風つねに吹き」色紙
藤原定「はかないものを」色紙

藤原定「路傍の燈籠風化しつつ」色紙
 藤原定 水彩画色紙
 藤原定「ぼくにはある」一枚物
 藤原定「山道は山と人との深い会話」一枚物

近藤信行

近藤信行「金峰山」原稿
 近藤信行「富士山」原稿

井伏鱒二・幸富講

井伏鱒二「笛の音」原稿
 井伏鱒二「君は天才」原稿
 幸富講寄せ書き皿 1971（昭和46）年4月17日

俳句と短歌 書画

富安風生「みちのくの伊達の郡の春田かな」短冊
 中村草田男「降る雪や明治は遠くなりけり」短冊
 山崎方代「白い花が咲いてゐる私は私より億万劫の遠きに在る」一枚物
 山崎方代「丸出しの甲州弁で申します花は死であり死は花である」一枚物

やまなし文学賞受賞作の挿絵原画

古屋良昭画「クレソン」（宮本彩子著）挿絵原画 第2回
 浅川洋画「流刑地にて」（小林安慈著）挿絵原画 第1回
 大窪萌木画「二人、溺れてる」（春名美咲著）挿絵原画 第1回
 深沢あざみ画「雪崩」（河野日奈著）挿絵原画 第1回
 大方岳 画「可惜夜の向こう側」（林翔太著）挿絵原画 第1回
 石川莉子画「音を紡ぐ」（丹沢みき著）挿絵原画原画 第1回

新収蔵品展

直筆を楽しむ

2025年2月1日(土)~3月23日(日)

休館日 月曜日(2月24日は健康)、2月12日(水)、2月25日(火)

2023年度から2024年度にかけて新たに収蔵した資料の中から、作家の直筆原稿や手紙、書画など個性的な筆跡が楽しめる資料を展示します。

樋口 一葉
高浜 虚子
富安 風生
土屋 文明
芥川 龍之介
藤原 定

山梨県立文学館
Yamanashi Prefectural Museum of Literature

